

有田・小田部 32

— 有田遺跡群第188次調査報告書 —

1999

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、国内外において重要な地域として多くの人に知られています。

近年、市内においては開発が急速に進み、発掘調査の件数が増えつつあります。教育委員会では、開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録による保存に努め後世に残そうと考えています。

本書は有田遺跡第188次調査の成果を報告するものです。調査の結果、弥生時代から中世にかけての遺構や遺物が発見されました。

本書が埋蔵文化財の保護と知識を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、費用負担など多くの協力をいただきました坂口富子様をはじめとする関係各位にたいし、心から感謝を表します。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

例 言

1. 本書は、1997年度に福岡市教育委員会が調査を実施した有田遺跡第188次調査の報告書である。調査の担当は加藤隆也である。
2. 本書に使用した遺構の実測図、遺構の写真は加藤が実測・撮影した。
3. 本書で用いる方位は全て磁北である。遺構の呼称は記号化し掘立柱建物をSB、土坑をSK、溝をSD、柱穴をSPとした。
4. 本報告に係るすべての出土遺物・記録類(図面・写真・スライドなど)は、報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である

遺跡調査番号	9759	遺跡略号	ART-188
調査地番	早良区有田1丁目31番6号		
開発面積	403.65㎡	調査対象面積	249㎡
調査期間	1997年12月15日～1997年12月24日		

本文目次

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
3. 調査の記録	3
4. まとめ	6

挿 図 目 次

Fig.1 調査地点図(1/1,000)	1
Fig.2 遺構配置図(1/100)	2
Fig.3 SD-01出土遺物実測図(1/3)	4
Fig.4 SD-02出土遺物実測図(1/3)	5
Fig.5 土坑実測図(1/40)	5
Fig.6 SK-01出土遺物実測図(1/3)	6
Fig.7 その他の遺物実測図(1/3)	7

図 版 目 次

PI. 1 (1)調査区全景(北から)	(2)SD-02掘削状況(南から)
PL. 2 (1)SD-02地積状況	(2)SK-01掘削状況(北から)

本 文 写 真

裏見返し p h. 1 発掘作業員

調査に至る経緯

1997年10月31日、坂口富子様より本市教育委員会に早良区有田1丁目31番6号における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの有田遺跡群内にあたり、東側隣接地は第181次調査が西側隣接地には第95次調査地が位置する。これを受けて埋蔵文化財課では1997年11月12日に試掘調査を実施し、遺構を検出した。その後、両者で協議を行った結果、発掘調査を同年12月15日より実施することとなった。

調査の組織

調査委託	坂口富子		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	町田英俊
	文化財部長		平塚克則
	埋蔵文化財課長	荒巻輝勝(前任)	柳田純孝
	埋蔵文化財第一係長		二宮忠司
試掘担当	埋蔵文化財課	松村道博	屋山洋
調査担当	埋蔵文化財第一係		加藤隆也
調査作業員	井上八郎	清原ユリ子	佐藤テル子
		柴田常人	堀川ヒロ子
			松井フユ子
			門司弘子
	水野由美子	指山歌子	指山浩子
			倉光政彦



Fig.1 調査地点図 (1/1,000)

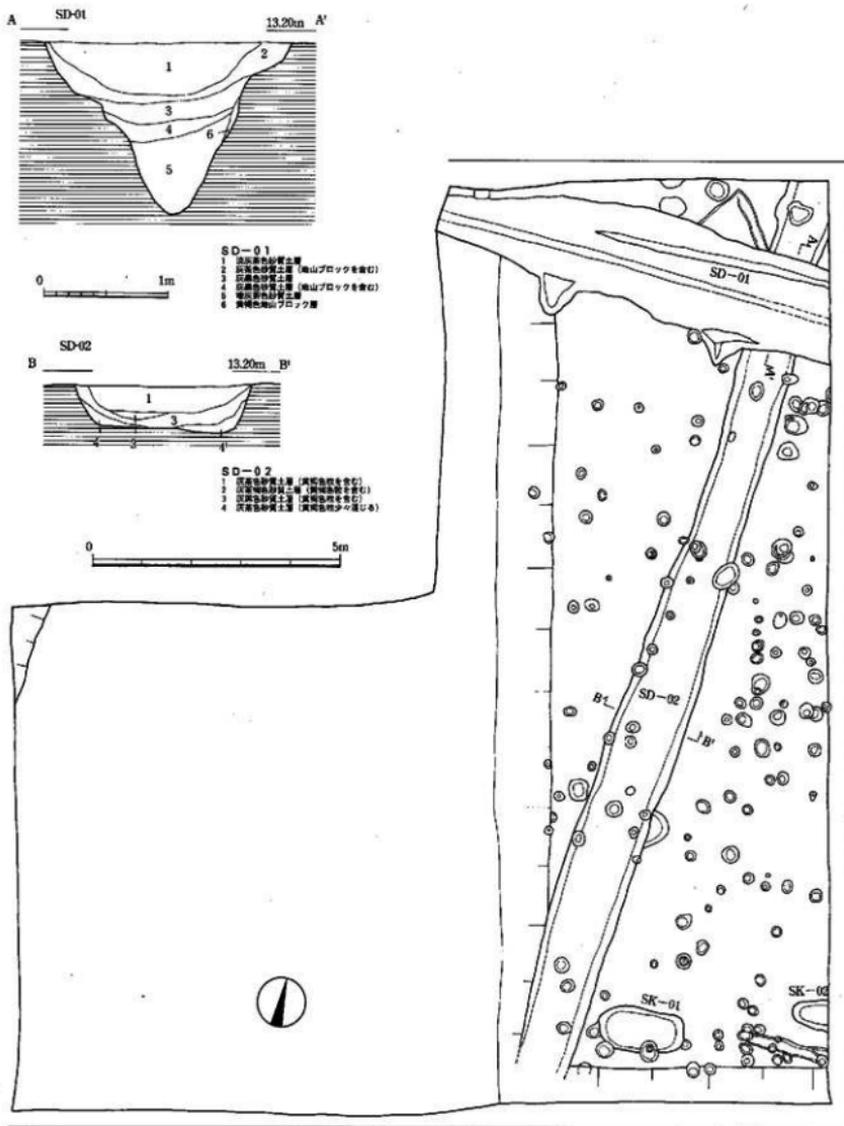


Fig.2 遺構配置図 (1/100)

調査の記録

検出遺構

調査地の地目は畑地であり、昭和40年代の区画整理により西側は著しく削平を受けている。高所となる東側では溝2条、土坑2基、柱穴などの遺構を確認した。西側は約0.9m下がっており、検出した遺構は少なく、北西隅に落ちがみられた。覆土は灰茶褐色砂質土で、西側に緩やかに落ちている。遺物が出土していないため具体的な遺構とは結びつけられないが、西側隣接地の第95次調査の1号道路状遺構かまたは3号溝の東側立ち上がりにあたと考えられる。

溝

SD-01

調査区北側に位置する東西溝である。SD-02を切り、第181次調査、第107次調査で同一と思われる遺構が確認されている。今回の調査では8m分を検出した。幅約2m、深さ1.4m、下端の幅は約0.2mを測り、断面形はV字形を呈する。南側肩部で約3.5mの間隔をとって削り込みが2ヶ所みられるがその性格は不明である。

出土遺物 (Fig. 3) 1は土師器環。糸切り。口径12.0、器高2.5cm。2は瓦質土器鍋。周防型足鍋と思われる、足部は欠損する。口径23.2cm、口縁は「く」の字形に内折する。体部外面には格子状のタタキ痕が残る、内面には細かなハケ目調整が施される。外面全体に煤が付着する。3～5は瓦質すり鉢。いずれも焼成が悪く、橙色を呈する。3は口縁端部が内面に突出する周防型。4、5は口唇端部が平坦で、5は片口。4は口径32.0cm。6は瀬戸黄釉皿。口径11.0、器高2.8、高台径6.7cm。淡黄白色の軟陶質の素地に淡黄緑色の釉が全面に施される。7は白磁皿。褐色の細かな軟陶質素地に、乳白色の不透明釉がかかり、表面には細かな氷裂が入る。産地、時期等については不明。8～11は明代白磁端反り皿。いずれも全面施釉後、高台畳付けを釉刺ぎする。8、9は通常の端反り皿のように高台が内傾せず、断面三角形を呈する。8は口径12.0、器高3.5、高台径6.6cm。9は高台径6.6cm、10は5.4cm。11は7.4cmで高台内に砂粒が付着する。12は龍泉窯系青磁碗V類。かなり厚く施釉される。13～18は明代青花。13、15は蓮子碗。13は口径16.0cm、15は高台径6.0cm。14は碗。畳付けから高台内は露胎で、内底は輪状に釉刺ぎする。高台径は5.2cm。華南系明代末の製品と思われる。16～18は茶筒底皿。16は外面に蕉葉文が描かれる。口径9.6cm。17は外底は露胎となる。胎土はやや軟陶質で、内底の文様は筆太い。華南系の製品か。18は全面施釉後、畳付けを釉刺ぎする。内底中心には釉上に鉄泥による魚文が配される。19、20は滑石製鍋。19はやや内湾気味の口縁で、口縁に向かって肥厚し上端面は平坦になる。外面にはジグザグ状に線刻が入る。20は口縁が断面三角形に外側に肥厚する。内面は使用によりかなり滑らかになっており、外面には煤が付着する。遺物は16世紀後半のものが出土している。

SD-02

調査区東側に検出した南北溝である。SD-01に切られる。今回の調査では19m分を検出した。方位は磁北より数度東にふっている。上端の幅は約1～1.4m、下端の幅は0.75～1.1mを測り、直線的にのびる。断面は逆台形を呈する。

出土遺物 (Fig. 4) 21は須恵器環蓋でかえりを持つ。22は坯身。底部からの立ち上がりは比較的まっすぐ、外底部はヘラ切りのまま木調整で、体部との境に手持ちヘラ削りを施す。底径は7.0cm。23～25は高坪脚。端部を短く下方へ引き出し、内面には鈍い稜が入る。26は蓋。体部外面中位に衝

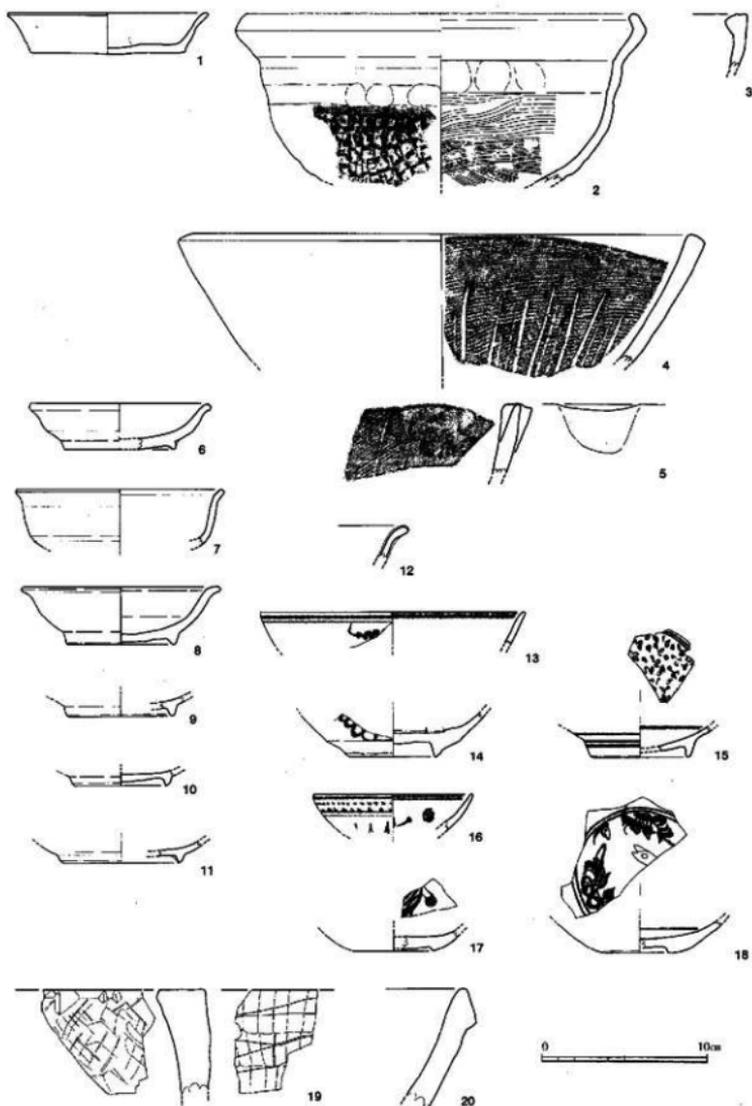


Fig.3 SD-01出土遺物実測図 (1/3)

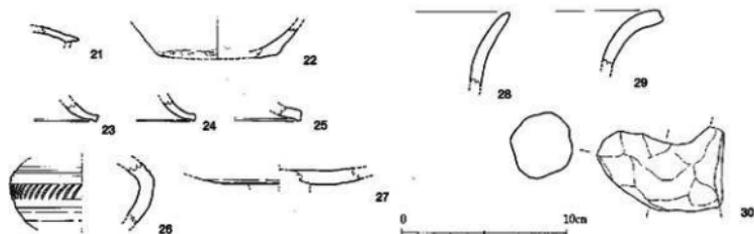


Fig.4 SD-02出土遺物実測図 (1/3)

圓押捺文を施し、それを扶んで上位に2条、下位に1条の浅い沈線を巡らす。底部外面は回転ヘラ削り。27は高坏と思われる。坏部外底部には回転ヘラ削りが施される。28・29は土師器甕の口縁部と思われる。いずれも外反し28は端部を尖り気味におさめ、29は上端面は面をなす。磨滅が著しく器面調整は不明瞭だが、29はハケ目調整と思われる。30は土師器甕の把手。遺物は古墳時代後期から奈良時代のものが出土している。

土坑 (SK)

SK-O1 (Fig.5)

調査区南側にて検出された。幅0.9m、長さ1.7m、深さ0.2mを測り、隅丸長方形を呈する土坑である。長軸の方向はN-80°-Eを指す。覆土は灰黒色砂質土の単層であり、炭化物粒、黄褐色粘質土粒を少量含む。

出土遺物 (Fig.6) 31~34は土師器小皿。31、32は糸切り、他は磨滅が著しく不明。法量(口径-器高)は31は8.2-1.0、32は9.0-1.1、33は9.0-1.0、34は9.8-1.1cm。ただし、32・34については小片のため法量は不明確。35は土師器坏。糸切りで板状痕が残る。法量は口径13.6、器高2.5cm。36~38は瓦器椀。36は口径16.4、器高6.0、高台径6.2cm。高台は小さく断面三角形を呈する。38も高台が小さく断面三角形を呈する。高台径6.0cm。37は口径17.0cmであるが、小片のため不明確。外面に押し出しと思われる痕跡が若干残る。39は白磁碗Ⅱ類。高台径7.2cm。光沢の強い透明釉で水裂が入る。40は白磁碗Ⅳ類。高台径8.0cm。41は白磁碗Ⅵ類。高台径5.8cm。高台内に白色上が付着する。42は白磁平底皿Ⅶ類。口径10.6、器高2.5、底径4.6cm。施釉後外底を釉割ぎする。内面には劃花文を施す。



Fig.5 土坑実測図 (1/40)

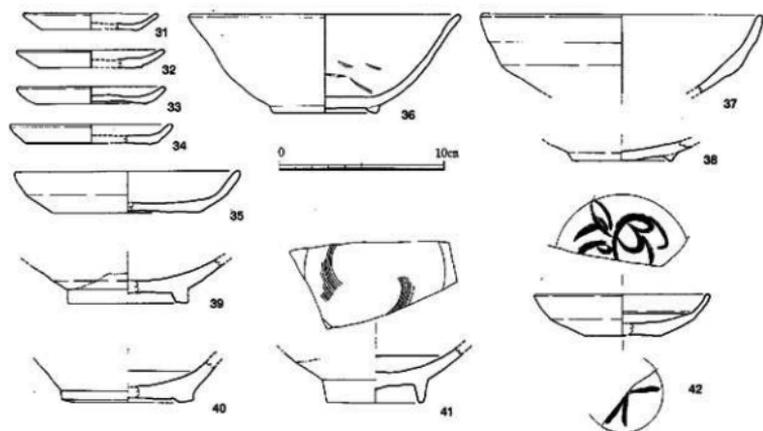


Fig.6 SK-01出土遺物実測図 (1/3)

外底には墨書が認められる。出土遺物から遺構の時期は13世紀前半～中頃か。

SK-02

調査区南側東端にて検出した。遺構の東側は調査区外にのびる。平面形は不明であり、深さは約0.2mを測る。底面は船底形を呈する。土師器坏片と白磁小破片が出土しているが時期は不明である。

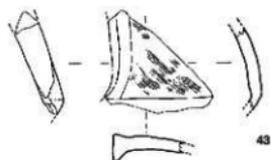


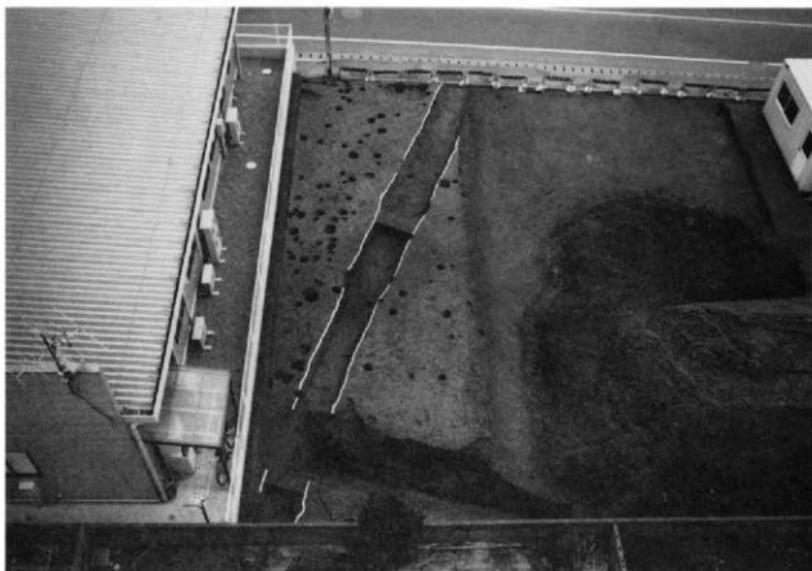
Fig.7 その他の遺物実測図 (1/3)

その他の遺物 (Fig.7) 43は調査区北東部遺物包含層より出土した手埴り形土器の蓋部である。胎土は淡橙褐色で砂粒を多く含み粗い。内面はナデ調整、外面はハケ目調整が施され、口縁に沿って指頭によりナデ調整される。

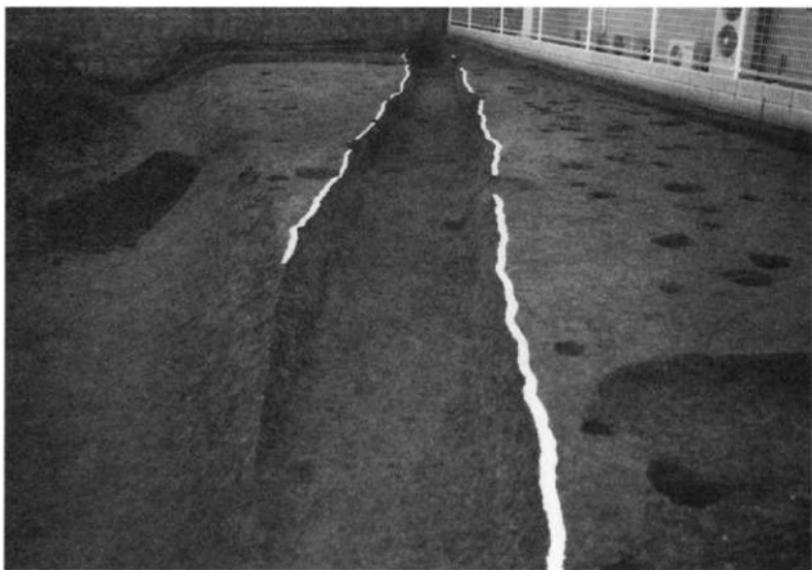
まとめ

今回の調査地点は弥生時代前期の環濠内に位置すると思われるが、この時期の遺構、遺物は検出されなかった。

調査区東側で検出したSD-02の中軸方向は磁北より約6度東偏している。北方向に約70m直線で延長すると第55次調査の溝が位置し、またそれに直行する溝として、第181次調査の004などがあり、この方向を計画方位とする構造物があったことを示唆している。しかし、溝出土の遺物は小破片で少なく、また遺構の一部を調査したにすぎない現時点では、年代をふくめて今後の調査の成果を待ちたい。



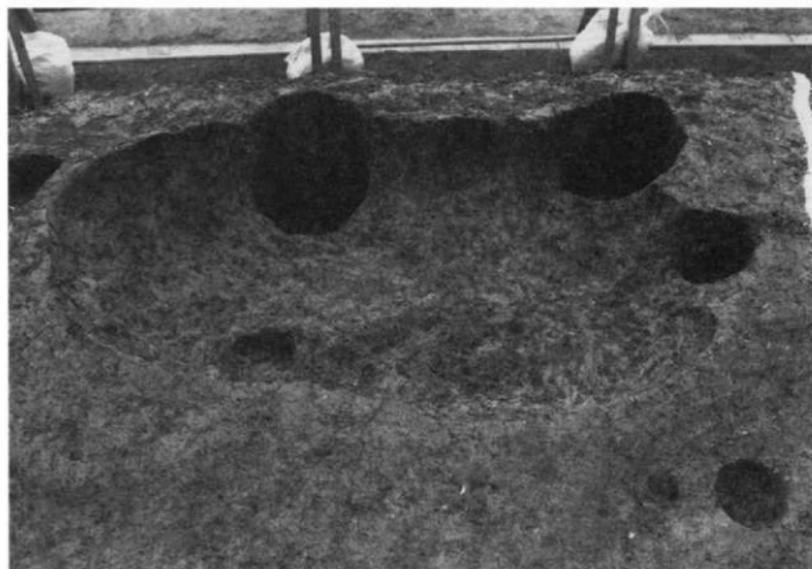
(1) 調査区全景 (北から)



(2) SD-02掘削状況 (南から)



(1) SD-02堆積状況



(2) SK-01掘削状況 (北から)



ph.1発掘作業員

有田・小田部 32

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 608 集

1999年 3月 31日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 松影堂印刷株式会社

